ドイツ初期敬虔主義思想の再検討

――シュペーナーの Erbauung 観――

中谷博幸

はじめに

いわゆる十七世紀危機論争以後、ヨーロッパ史上十七世紀のもつ重要性が認識されるようになってきた。この危機は心性の面にも及び、不安の克服が時代の要請となる。この心性の危機は一つには近世における民衆文化の変質ないし抑圧となってあらわれるとともに、国教会体制との係わりにおいては十六世紀末から十七世紀にかけての信仰形態（Frömmigkeit）の危機となってあらわれる。後者の中から、それぞれ共通な性格を有しつつ、フランスではジャンセニズム、イングランドではピューリタニズム、ドイツでは敬虔主義（Pietismus）[1]といった宗教的革新運動が生み出されていった。

ドイツの場合、信仰形態の危機から宗教的革新運動としての敬虔主義への展開を示すために、ヴァルマン[2]は広義の敬虔主義と狭義の敬虔主義という区別を行なった。ヴァルマンによると、スコラ的な教義論争に陥ったルター派領邦教会の正統主義は広く信仰形態の危機を引き起こし、十六世紀末頃から「教義から生活（敬虔の実践）へ、義認と罪の赦しから聖化と霊的成長へと明白に強調点を移す、プロテスタンティズムの新たな信仰形態[3]」が生じた。ヴァルマンはこれを広義の敬虔主義と呼び、ヨーハン・アルント Johann Arndt（一五五三―一六二一）に始まると考える。他方、この広義の敬虔主義の流れに立ちつつ、「正統主義と対立し、教会的・宗教的共同生活の新たな形態を生み出した社会的運動[4]」である狭義の敬虔主義へと道を開いたのがシュペーナー Philipp Jacob Spener（一六三五―一七〇五）だとされる。ヴァルマンはルター派正統主義から激しい批判を浴びることになった、シュペ

ーナーの次の二つの考えに注目する。一つは、領邦教会の公的礼拝とは異なる、敬虔であろうとする人々からなる私的集会（コレーギア・ピエターティス）で、シュペーナーはこれを教会改革の核として推奨した。もう一つは終末論に係わる。ルター派正統主義が迫り来る最後の審判を説くのに対して、シュペーナーは審判の前に千年王国論的な教会のより良い状態が実現すると主張し、その教会改革のプログラムに保証を与えようとした。このようなシュペーナーに独自な考えが、狭義の敬虔主義を生み出すうえで決定的な役割を果たした、とヴァルマンは考える。

以上のようなヴァルマンの見解の背景には敬虔主義理解をめぐる論争があった。戦後、神学的観点から活発に敬虔主義の研究を行ないその後の研究に大きな影響を与えたシュミット⑤は、シュペーナーの独自性を教会改革の具体的な提案ではなく、その「再生(Wiedergeburt)」観に求めた。彼によると、三十年戦争以後ドイツでは、制度・儀式としての教会を否定しキリスト教を純粋な内面性として理解する神秘主義的スピリチュアリズムが力をもつにいたる。これに対して、神秘主義的スピリチュアリズムの長所である「ラディカルに原始キリスト教に返らんとする傾向」をルター派正統主義の中に移植し、同時に「教会を解体させる傾向」を防ごうとしたのが敬虔主義であり、シュミットによればそれを可能にしたのがシュペーナーの「再生」であった。再生とは、古き自己に死んで、霊的に新しく生まれ変わり、神とともに歩むことを意味する。これは全く内的な出来事であり、神の一方的な働きによって生じる。古き人と再生者とは質的に異なり、比喩的に死から生への転換に擬せられる。そして再生は具体的な実を結ぶとされる。ところで以上のようなシュミットの見解では、シュペーナーが神秘主義的スピリチュアリストから取り込んだ再生理解をいかに教会化し、その欠点を防いだのかを説得的に示すことができない。換言すれば、シュペーナーと神秘主義的スピリチュアリストとの再生理解の相違は何か、そもそも両者の違いをどうとらえるかという疑問が残った。

以上の問題点をシュミット的な神学理解を徹底させることによって解決しようとしたのが、シュテフラー⑥である。彼は敬虔主義(pietism)を、(一)キリスト教の本質を教義や儀式ではなく神との個人的な関係にみる、(二)古き自己に死んで新たな生命に生きることの強調、(三)聖書主義、(四)反正統主義、という四つの特徴をそなえた十七世紀のヨーロッパのプロテスタンティズムに広く見られる信仰形態であり、ドイツの敬虔主義はその現象の一部にすぎないとした。そして、ドイツの敬虔主義の父をシュペーナーではなく、アルントに見出した。シュテフラーは、以上のよう

な四つの特徴の点で、シュペーナーとアルントの間には相違はないと判断したのである。

前述したヴァルマンの見解は、シュテフラーの見解を吸収しつつ、シュミット的な難点を神学的理解ではなく、教会改革に注目することによって解決しようとしたものであると言ってよいであろう。シュテフラーのいう敬虔主義を広義の敬虔主義として理解しつつ、シュペーナーの独自性をその教会改革のプログラムに見出したのである。しかし、シュペーナーにおいて広義の敬虔主義的要素と改革プログラムとはどのように結びついているのか。それらを結びつけるシュペーナーの思考様式はいかなるものなのか。ヴァルマンはこの繋がりを十分に統一的に説明するには至っていない。本稿の課題はこれらを明らかにしようとすることにあるが、それは（狭義の）敬虔主義の中でも、一六七五年から一六九五年頃までのいわゆる初期敬虔主義の思想の特徴を明らかにすることとなろう。この時期、敬虔主義はシュペーナーを中心とした台頭期で、彼の思想とその人的ネットワークが結節点となっていた。一六九〇年以後になると、シュペーナーの思想を土台としつつもハレやヴュルテンベルクなど各地方で独自の特徴を形成していく。本稿の課題は、一六九〇年以後の展開を理解するうえでも、その前提となるであろう。

① シュペーナー及び敬虔主義についての研究史は、とりあえずつぎのものを参照。拙稿「最近の敬虔主義研究――特にシュペーナーをめぐって――」『史林』六八巻一号（一九八五年）及び、村上涼子「ドイツ・ピエティスムス研究の新たな展開」『史学雑誌』百一編三号（一九九二年）。

② J. Wallmann, *Philipp Jakob Spener und die Anfänge des Pietismus*, 2., überarbeitete und erweiterte Auflage (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1986); Ders., *Pietismus* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht,1990)（拙書評『西洋史学』一六二号、平成三年）。

③ J. Wallmann, Pietismus und Chiliasmus, *Zeitschrift für Theologie und Kirche*, Bd. 78, 1981, S. 239.

④ J. Wallmann, Die Anfänge des Pietismus, *Pietismus und Neuzeit*, Bd. 4, 1979, S. 53.

⑤ M. Schmidt, Speners Wiedergeburtslehre, in: M. Greschat (Hrsg.), *Zur neueren Pietismusforschung* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977); Ders., *Pietismus* (Stuttgart: Kohlhammer, 1972)（邦訳、小林謙一訳『ドイツ敬虔主義』教文館、一九九二年）。なお他にシュペーナーの再生については、伊藤利男「シュペーナーの敬虔主義理論」『文学研究』第九十号（九州大学文学部、平成五年）参照。

⑥ F. Ernest Stoeffler, *The rise of evangelical Pietism* (Leiden, 1965); Ders., *German Pietism during the 18th century* (Leiden, 1973).

第一章　考察の対象

シュペーナーにおいて広義の敬虔主義的要素とその教会改革のプログラムがいかに結びついているかを明らかにするためには、何よりもシュペーナーの教会改革のプログラムを記した書物を考察の対象としなければならないであろう。その点で最も重要なものは、『敬虔なる願望』[1]である。本稿では、これと『霊的祭司職』[2]を取り上げて検討することとする。ところで以上の点から、再生論が本稿の課題の検討には役立たないことが明らかである。何故なら、この二つの著作では再生という用語自体もほとんど使われず、論の展開にあたって重要な役割を果していない。シュミットはシュペーナーの説教を考察してそこから再生論の重要性を引き出したが、改革プログラムとの関連を説明することは不十分であった。本稿はシュペーナーの改革プログラムを統一的に理解する視点を見出し、その特徴を把握することにあるので、彼の説教よりもその二著を取り上げることが適切である。彼の改革案の全体像は個々の説教よりも、それらの著作において最もよく理解しうるからである。次にそれぞれの著作の成立事情を簡単に記しておこう。

シュペーナーはその生涯に多くの説教や著作また書簡を著わしたが[3]、『敬虔なる願望』はドイツ敬虔主義のマニフェストとされる、まさに彼の主著と呼べるものである。これはもともと、シュペーナーがルター派教会の主席説教者をつとめていた帝国都市フランクフルト・アム・マインで、一六七五年春にヨーハン・アルントの説教集が新たに出版されるに際して、出版社に請われてその序文として書いたものである。シュペーナーはその中で、彼が考えていた教会改革の提案を述べた。これは大きな反響を呼び、同年秋には、アルントの説教集とは分離して『敬虔なる願望』と題して出版されている。多くの神学者がそれに対して賛意を表明したが、徐々に反対意見もあらわれてくる。特に霊的祭司職とコレーギア・ピエターティスの提案、また千年王国論的終末論に批判が向けられた。それらはルター派正統主義の教義に抵触し、領邦教会の秩序を脅かすということによる。さらに、フランクフルトでもたれていたコレーギア・ピエターティスの集会についての現実からかけ離れたゴシップが各地に広まった。たとえば、女性がその集会で説教をし、子供がギリシア語やヘブル語を学び、主婦たちは集会に出るため家政を怠っている、という評判がたった。このような批判に対して、シュペーナーは一六七七年に『霊的祭司職』を出す。『敬虔なる願望』において簡潔にしか触れなかった霊的祭司職を包括的に聖書に基づいて述べるとともに、その必

要性とそれが決して領邦教会の秩序を脅かすものでないことを強調している。④

ところで、この二著において重要な役割を果たしているのが、Erbauung という概念である。⑤ 筆者の知る限り、その点に注目した研究はない。逆に Erbauung には狭隘な敬虔主義⑥というイメージが結びついている。たとえば、『キリスト教大辞典』（教文館、昭和三八年）の「建徳 Erbauung」の項目には、「特に敬虔主義においては、宗教的感情をあおりたて信仰の覚醒を促すような説教を建徳的と呼んだこともあった」とある。シュペーナーの Erbauung 観がこのような理解と大きく異なり、彼の改革プログラムと密接な係わりをもっていることを、以下明らかにしたい。

次章では、シュペーナーの Erbauung 観を考察する前に、彼のキリスト教理解と時代認識を検討しておきたい。「改革」には本質理解と状況把握が必ず前提となるからである。

① テキストとして、Ph. J. Spener, *Pia Desideria*, Hrsg. v. K. Aland, 3. Aufl. (Berlin: Walter de Gruyter, 1964) を用いる。引用にあたっては、PD と略記し、そのあとにページ数を記した。なお、堀孝彦訳『敬虔なる願望』（佐藤敏夫編『世界教育宝典（キリスト教教育編）V』（玉川大学出版会、一九六九年、所収）を参照した。

② テキストとして、Ph. J. Spener, *Das Geistliche Priesterthum* in: *Philipp Jakob Spener Schriften*, Bd. 1 Hrsg. v. E. Beyreuther (Hildesheim: Georg Olms, 1979), S. 549-731 を用いる。引用にあたっては、GP と略記し、そのあとにページ数を記した。

③ P. Grünberg, *Philipp Jakob Spener*, Bd. 1 (Göttingen 1893), Neudruck *Philipp Jakob Spener Schriften. Sonderreihe*, Bd. 1, 3. Teilband (Hildesheim: Georg Olms, 1988), S. 205-388 にシュペーナーの詳しい著作目録がのっている。

④ P. Grünberg, *op. cit.*, 1. Teilband, S. 175ff.

⑤ ヴュルテンベルクの敬虔主義者ヘディンガーにおいても Erbaung は重要な概念である。拙稿「近世ドイツの聖職者論とキリスト教文化」（『清水汀教授退官記念論文集』京都あぽろん社、一九九一年、所収）参照。

⑥ たとえば、ヘッセの『車輪の下』にくつ屋で「信心深い敬虔派信者（der fromme Pietist）」のフライクおじさんが登場する。この小説の舞台となったヴュルテンベルク地方は、十八世紀にプロイセンのハレとともに、敬虔主義の中心地であったところである。ヘッセは、全体として好意的に描いているものの、この二十世紀の敬虔派のくつ屋を「利口ではあったが、単純で片よっており（schlicht und einseitig）、信心にこりかたまっている（Pietisterei）ため多くの人から嘲笑されていた」と描いている。H. Hesse, *Die Romane und die grossen Erzählungen*, Bd. 1, (Frankfurt/Main: Suhrkamp, 1982), S. 200f.（高橋健二訳、新潮文庫、昭和五五年、五四頁。）

第二章　シュペーナーのキリスト教理解と時代認識

シュペーナーはキリスト教をどのように理解していたのであろうか。『霊的祭司職』の献辞の冒頭で、次のように語っている。

「私たちのキリスト教の本質は信仰と愛、信仰と敬虔な生活(gottseliges leben)にあるということはよく知られていて、主の御心を理解しているあらゆる人々にとって、確実な事柄です。このうち信仰は、神の恩寵と神が与えて下さる救いを私たちが受け取るための力です。他方、生活の敬虔さはそのような生ける信仰の果実であり、私たちに与えられた救いの重要な一部となっています。それゆえ、教会のあらゆる神のしもべにとって、この二つのために熱心に心をくだくことは、大切な義務であるといえます。それによって、信仰があらゆる誤りから全く守られ、ただ純粋な神の言葉によってとらえられ、そのような信仰の果実がキリストの規範に従った生活において豊かにもたらされるようになるためです。たしかに、この二つはお互いに分離されることなく、敬虔の教え(die lehre der gottseligkeit)が真理を基礎にもち、真理がその果実なしに語られることのないように常に扱われねばなりません」(GP, 552f.)。以上のようにシュペーナーは、救いが信仰とその果実としての敬虔な生活という二つの柱より成り立っていることを力説する。同じ理解は当然、『敬虔なる願望』でも前提とされている。たとえば、「キリスト教は知識だけでは全く不十分であり、その本質はむしろ実践(praxis)にある」(PD, 60f.)と語っている如く、そこでは二つの柱のうち後者が強調されている。

では、このようなキリスト教理解は、シュペーナーの時代認識とどう結びついているのであろうか。『敬虔なる願望』には純粋な教え(die reine lehre)や真実の教え(die wahre lehre)、教えの純粋性(die reinigkeit der lehre)という言葉がしばしば出て来る。そのほとんどは、ルター派教会と結びつけて使われている(たとえば、PD, 10, 22, 36, 40, 62)。シュペーナーはその点にルターが行なった宗教改革の最大の意義を認めている。「私たちの福音教会〔ルター派教会〕は聖なる神の道具であるルター博士を通じて前世紀に再び明白に指し示された、高価で純粋な福音(das theure und reine Evangelium)を、外的告白によって受け入れています。それゆえ、そこにおいてのみ、真実の教会がなお可視的であることを私たちは認めねばなりません」(PD, 10f.)。宗教改革は民衆に再び神の言葉をもたらした(PD, 58)。シュペーナーによれば、ユダヤ人のバビロン捕囚からの解放と同じく、宗教改革は教皇主義的ローマの霊的バベルからの解放をもたらした。しかし、ユダヤ人たちがバビロン捕囚から解放された後、神の宮の建設を邪魔する敵対者があらわれ、ユダヤ人たちも正しい礼拝を回復することに熱心ではなかった。同じことはルター派教会にも当てはまる(PD, 40ff.)。

シュペーナーによれば、ルター派教会では宗教改革の後、信仰

の果実である敬虔な生活がかえりみられていない。そして、信仰理解自体も問題がある。なるほど教えという点では、ルター派教会は純粋で真実な教会ではあるが、その信仰告白は外的告白にすぎない。ルター派教会の牧師についてシュペーナーは次のように語っている。「彼らが信仰とみなしているもの、また彼らがそれに基づいて教えているものは、聖霊の照明と証言およびその封印とによる、神の言葉を通じてよびおこされた正しい信仰ではなく、人間の想像物にすぎません。彼らは、他の人々がその研究において学ぶ場合と同じように、聖霊の働きなしに人間的な努力を通じて、ただ聖書の文字から正しい教えを理解しています。そしてそれに同意し、他の人々に語ることもできます。しかし、彼らは天からの真実の光と信仰生活とからは全く離れています」(PD, 17)。信仰がなくても、純粋な教えを理解することはできるのである。偽の信仰においては、聖霊が働かずただ人間の能力によって聖書を理解しようとし、信仰の果実が欠如している。

以上のように、シュペーナーは、宗教改革後のルター派教会を、信仰義認を純粋な教えとして知的に同意してはいるが、生きた信仰は衰え、信仰の果実である敬虔な生活は全くかえりみられなくなっている、と見ていた。このような傾向に対して、敬虔な生活の大切さを強調したのが、シュペーナーによれば、ヨーハン・アルント[①]であった。アルントはクヴェードリンブルクやツェレでルター派聖職者を務めた人物であるが、その著書『真実のキリスト教[②]』によって多大な影響を与えた。その本はドイツ語圏にあって、当時最も普及した書物であり、一六〇五年にその第一巻が出てから『敬虔なる願望』が出版されるまでに、一二以上の場所で五十以上の版が存在した[③]。またヨーロッパの各言語にも翻訳されている。彼はその神秘主義的傾向の故にルター派正統主義の神学者から批判されるが、他方で多くの信奉者を見出した。彼らのうち、アルントの神秘主義的傾向を強く継承した聖職者の中からは、そのスピリチュアリズムの故に、ルター派領邦教会体制から出て行く人々もいた。ところでアルントは第一巻の序文で次のように語っている。「愛するキリスト者よ、あなたがいかにしてキリストへの信仰を通じて自らの罪の赦しをえるかということばかりではなく、あなたがいかにして神の恩寵を聖なる生活のために正しく使用すべきであるか、またいかにしてあなたの信仰をキリスト教的な生活によって飾り、示すべきであるか、この小冊子はそれらについて導きを与えることでしょう。なぜなら真実のキリスト教は言葉や外面的な事柄 (der äußerliche Schein) にあるのではなく、生ける信仰にあります。そこから正しい果実とあらゆるキリスト教的徳が生まれてきます[④]。」ここで語られている内容は、先

ほど述べた、生ける信仰とその果実である敬虔な生活というシュペーナーのキリスト教理解と一見同じものである。しかし、シュペーナー自身は、このアルントの立場に満足はしていなかった。そうであれば、アルントの説教集の序文にわざわざ彼の教会改革の提言をすることはなかったであろう。アルントの場合、『真実のキリスト教』第一巻をふり返ってその四二章で、悔い改めが「真実のキリスト教、聖なる生活と行状の始まりであり基礎であり、真の信仰による私たちの救いの始まりです」[5]と述べているように、何よりもまず悔い改めを強調する。彼がその書物を通じて一貫して語っているのは、キリスト者個々人の内面であり、教会改革に及ぶことはなかった。

一方シュペーナーは、キリスト者個々人における生ける信仰とその果実の重要性を強調するアルントを高く評価しつつ、教会改革の必要性を説くことによって、時代に対して新たな一歩を踏み出そうとする。[6] そもそも『敬虔なる願望』のタイトルは『ピア・デジデリア、すなわち真の福音主義教会の神の御旨にかなう改善(besserung)への敬虔なる願望』である。この教会の改善は、彼の時代認識の他の注目すべき点である終末論[7]と深く係わっている。『敬虔なる願望』の中で、「聖書をよく見ると、神がこの地上における教会のより良き状態(einigen besseren zustand)について約束されていることを、私たちは疑うことができません」(PD, 63)と語る。彼は非常に慎重に言葉を選んでいるが、これは千年王国論的性格をもつものである。もちろんルター派正統主義は宗教改革者の見解を継承して千年王国論をはっきりと否定しており、それに対して極度にアレルギー的な反応を示した。『敬虔なる願望』が出された時、その非難の的の一つとなったのは、この終末論的理解に係わるものであった。シュペーナーはのちに『将来のより良き時代の希望』(一六九三年)を出版したり、書簡などを通じて終末に関する発言を繰り返した。たとえば、一六九二年十二月三〇日付けの書簡で、「黙示録二〇章の千年に関して、……次の二点は疑うことができない。第一に、千年はまだ始まっておらず、教皇制が倒れるとともに始まる。このことを私は黙示録一九章二〇節と二〇章一〇節の結びつきから理解する。……第二に、千年〔王国〕はキリストの王国にただ良きものをもたらすであろう。何故なら、あらゆることを決定する自信はないが、次の事は誤りないことだと思うからである。すなわち、それ〔千年〕は、悪しき誘惑者の元凶であるサタンが深淵の底につながれている至福の時代である[8]」と書いている。彼は「この地上における教会のより良き状態」を千年王国と考えていた。ただ彼は、その社会的政治的批判の要素を取り去る。それは「聖徒たちの反乱や暴動に

よって生じる、あるいはこの世の剣で打ち立てられる王国」[9]ではない。彼は千年王国を教会改革と結びつける。「一方でユダヤ人の改宗と教皇制の霊的弱体化のために、他方で私たちの教会の改善（besserung）のために、できる限りのことがなされるよう怠らずに努めることは、私たちすべての責務です」（PD, 45）。ユダヤ人の改宗と教皇制の没落は、シュペーナーが千年王国のおとずれのしるしと考えていたものである。「ますます完全になっていくことは、全教会にあてはまる。」そして、教会の完全とは、「そこにいかなる偽善者もいないということではなく、……公然たるつまずきから自由であり、……教会の真のメンバーが多くの果実によって豊かに満たされる」（PD, 48 f.）ことである。これは敬虔な生活が実現していた新約時代の教会が再び回復されることを意味した。シュペーナーは同時代を、今は悲惨な状態ではあるが、まもなく千年王国論的なよき状態の教会がおとずれる時と理解していた。この期待が彼の改革をめざす努力の源となった。

以上述べてきたことから、シュペーナーの改革の特徴として、次の三点を指摘することができるであろう。第一に、彼はキリスト教を生ける信仰とその果実である敬虔な生活という二つの柱において理解した。この理解においてアルントと共通する。第二に、当時のルター派教会はそこから著しくかけ離れていることを痛感し、それを改革しなければならないと考えた。彼は自らの課題を、単に個人の課題としてではなく、時代がその解決を要請している課題であると把握した。そして第三に、その改革を、アルントのようにキリスト者個々人のレベルでの悔い改めを中心とする変革と考えるのではなく、教会全体の改革の問題として理解した。『敬虔なる願望』で具体的な提案を述べる前に、シュペーナーは「私たちの全教会を、とりわけ以下の方法で神の恩寵によって助け、それを再び栄光ある状態にもどしたい」（PD, 53）と書くのである。この理解の背後には、彼の千年王国論的終末論に立つ時代認識が存在する。彼は具体的に六つの提案を行なっている。第一に、神の言葉を人々の間に豊かに宿らせる。そのためにシュペーナーは特に、牧師の指導の下に行なわれる有志からなる聖書を読む私的集会（コレーギア・ピエターティス collegia pietatis や privatversammlung、Konventikel 等と呼ばれる）をすすめる。第二に、霊的祭司職の実践。コレーギア・ピエターティスはこれにも係わる。第三に、キリスト教の本質が知識ではなく実践にあることを人々に深く植えつけること。第四に、不信者・異端者を改宗させるには、宗教論争は不毛であり、むしろ心からなる愛の実践が大切であること。第五に、神学生教育の改善、ここでもコレーギア・ピエターティスがすすめられる。第六に、説教の

改革。以上の六つの提案に一貫して強調されているのは、敬虔(Gottseligkeit)の重要性である。そして、具体的な改革で重要なのは、コレーギア・ピエターティスと霊的祭司職という考え方である。それ故、特にそれらに注目する必要がある。

では、このような彼のキリスト教理解と教会改革は、Erbauung観とどのように係わるのであろうか。上述した第一の特徴であるキリスト教の本質理解と第三の特徴である教会改革について以下、検討したい。

① アルントについては、山内貞男『近世初期ドイツ神秘主義研究』(私版、一九八八年)および、伊藤利男「敬虔主義の範例と先駆——若きルターとアルントの場合——」『文学研究』第八九号(九州大学文学部、平成四年)参照。

② *Vier Bücher vom wahren Christenthum* 第一巻が出るのは一六〇五年。全四巻となるのは一六〇九年。その後、二巻が追加され、*Sechs Bücher vom wahren Christenthum* として流布する。本稿では次の版を使用した。Johann Arndt, *Sechs Bücher vom wahren Christentum nebst dessen Paradies=Gärtlein* (Stutgart: J. F. Steinkopf, 1919).

③ J. Wallmann, *Pietismus*, S. 19.

④ J. Arndt, *op. cit.*, S. 3.

⑤ *Ibid.*, S. 178.

⑥ 敬虔主義を広義と狭義に分け、前者の父をアルントにおく見方は、すでにシュペーナーの意識にあったものである。

⑦ シュペーナーの終末論とその影響については、とりあえず拙稿「十七世紀末ヴュルテンベルクの終末論」『香川大学教育学部研究報告第一部』七七号(一九八九年)参照。

⑧ *Philipp Jacob Spener Schriften*, Bd. 15, Korrespondenz, 1. Teilband, Hrsg. v. E. Beyreuther (Hildesheim: Georg Olms, 1987), S. 259f.

⑨ Ph. J. Spener, *Behauptung der Hoffnung künftiger Besserer Zeiten* (Frankfurt/Main, 1693), ただし G. Maier, *Die Johannesoffenbarung und die Kirche* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1981), S. 362 から引用。

第三章 シュペーナーの Erbauung 観

第一節 Erbauung の本質

まず、シュペーナーの改革の三つの特徴の第一点、キリスト教は生ける信仰とその果実である敬虔な生活という二つの柱からなるという理解が Erbauung とどう係わるかを検討してみよう。その点について、彼は『霊的祭司職』で明確に次のように語っている。「霊的祭司の務めは、いかにして彼らすべてが信仰の基礎を堅固なものとされ、敬虔な生活へと erbauen されるかを、ただ神の言葉の中に求めることです」(GP, 552f.)。ここでは erbauen は明らかに、信仰から敬虔な生活への過程をあらわす言葉として使われている。同じ理解は『敬虔なる願望』においても見られる。たとえば、説教の改革を扱ったところで、シュペーナーは「彼ら〔神学生〕が説教におけるすべてをいかに erbauung のた

めに適合させたらよいかが、彼らにたやすく明らかになるように訓練すべき」であることを述べた直後に、「説教もまた、信仰とその果実とが会衆のもとでできる限り促進されるように、すべての人によって整えられるべき」(PG, 78f.)であると語っている。ここでもシュペーナーは、信仰が促進されその果実が生み出されることを Erbauung であらわしている。Erbauung は erbauen から派生した言葉であり、まさに動詞的性格をもっている。それが gottselig と異なる。こちらはその名詞形である Gottseligkeit しかもたない。以上のように、Erbauung あるいはその動詞形の erbauen は単に宗教的感情を喚起するという意味ではなく、彼の信仰理解の核心部分をあらわす動的な言葉であった。

erbauen は bauen と同じく、建てるという意味をもっている（その新約聖書との関連、ルター訳ドイツ語聖書との関連については第二節で触れる）。シュペーナーにとって erbauen とは信仰を土台としてその上に敬虔な生活が築かれていくことを意味した。敬虔な生活はあくまでその土台の上に築かれる。信仰義認との関連について、シュペーナーは次のように語っている。「私たちはただ信仰によってのみ救われるのであって、業ないし敬虔な生活はなんら救いのためになすことはなく、むしろ信仰の果実として私たちが神に負っている感謝の一部を構成するものです。私たちはそのことをよろこんで認めます」(PD, 32)。彼はルターの「信仰のみ」を承認する。その点でルター派正統主義の立場に立つ。そしてこのような生ける信仰とその果実である敬虔な生活を生み出すのが神の言葉である。ここから、「私たちの間に神の言葉をいっそう豊かにやどらせること」(PD, 54)を、改革の提案の第一としてあげる。

では、神の言葉により、また生ける信仰によって生み出される敬虔の本質は何なのか。そこで、gottselig や Gottseligkeit がどのような言葉と結びつけられているかを見てみると、興味深いことに気づく。die ernstliche innerliche gottseligkeit (PD, 18)、gottselige hertzen (PD, 39, 42, 68)、gottselige gemüther (PD, 4, 42, 79)、gottselige nachdenckung (PD, 53) のように、hertzen や gemüther、nachdenckung といった内面に係わる言葉が多く結びついている。そして、説教の改革を述べたところで、次のように語っている。「私たちの全キリスト教は内的で新しい人にかかっており、このような人の魂が信仰であり、そのような人の業が生命の果実なので、説教はことごとくその点にむかって整えられねばなりません。……私たちは基礎を正当にも心の中におき、この基礎から生じないものはすべてただ偽善にすぎないことを示すべきです。それ故、人々をしてまずこのような内的なも

のに従事して、神の愛と隣人への愛を自らの中にふさわしい方法でもって呼び覚ますことに慣れさせ、その後にはじめてこのような基礎にたって業をなすように慣れさせるべきです」(PD, 79 f.)。シュペーナーは敬虔の本質を心におく。

ではそれはどのような心でなければならないか。ここでまた建てあげるというモチーフがあらわれる。シュペーナーはイエス・キリストの言葉を einfalt (素朴) と呼び (PD, 26)、「キリストの教えの素朴さ (die einfalt der Lehr Christi)」(PD, 63, cf. 27) という表現を使う。また神学は「使徒の素朴さ (die Apostolische einfalt)」(PD, 74)」にもどらねばならないと言う。この einfalt を土台にして何を建てるかが問題となるが、心が好奇心 (fürwitz) で満たされると (PD, 26)、「ただ知的に熟達しようとして高慢になり」、「自らの erbauung に役立つことには注意を払わず、自分の名誉」につとめ、論争の弊害に陥っていく (GP, 613)。好奇心ではなく、この einfalt を土台にして、心も einfältig でなければならない。この einfältig の特徴は『霊的祭司職』で詳しく述べられている。einfältig な人々とは、「信仰の基本 (die einfalt deß glaubens)」(GP, 613) を単純に信じ、「聖霊の働きと力とに自らをゆだねることをはっきりと決心し (mit einfältigem vorsatz)、さらに学んだことを知識にとどめるだけでなく、神の栄光のために従順に用いようとする明白な意志をもって聖書をとりあげ」(GP, 609)、他の人々とともに erbauen されていくことに努める (GP, 621 ff.) 人たちのことである。

以上のように敬虔の本質は心におかれる。しかし、それが具体的に何を生み出すかは詳論されない。一方で、敬虔と対立するものとして、世俗精神 weltgeist (PD, 68, 71) が語られる。これは、当時の宮廷のバロック文化や民衆文化に係わるものである。敬虔はそれらに対する批判の役割を果たすが、『敬虔なる願望』や『霊的祭司職』では詳論されていない。

第二節　Erbauung と教会改革

第一節で明らかにしたような Erbauung の実現を、シュペーナーは一人一人の孤独な内面的営みによるものとは考えない。彼は教会改革という視野の下にこの問題を考える。第二章で明らかにしたように、シュペーナーが『敬虔なる願望』を書いた目的は教会の改革にあった。ところで興味深いことには、『敬虔なる願望』で全体としての教会の改革をはっきり示す言葉としてシュペーナーが使っているのは、bessern ないしその名詞形の Besserung である。そして改革された教会の状態をあらわす言葉として besser が使われる。すでに第二章で見たように、『敬虔なる願望』のタ

イトルには Besserung があらわれているし、千年王国論的待望をもって、シュペーナーはキリスト者に、「一方でユダヤ人の改宗と教皇制の霊的弱体化のために、他方で私たちの教会の besserung のために」努力するように訴えた。その他、四頁で「常に besserung がでまかせに延期される」と言うとき、それは教会の改革を指している。また、六十頁では霊的祭司職の実行（これについては後で触れる）によって、「ついには教会が著しく bessern される」と語っている。六七頁でも牧師の務めとしての der Kirchen besserung（教会の改善）について語っている。一方、教会全体の改革と erbauen とを直接結びつけてはいない。それでは Erbauung は教会改革とどのように係わるのであろうか。

『敬虔なる願望』の目的に関して、「たとえ多くはなく、少数の人々であったとしても、誰かがこの書物を通じて erbauen され、……神によってより多くの天分を与えられている他の啓蒙された人々が、真の敬虔さ(gottseligkeit)を促進するというこの最も大切な仕事を真剣に取り上げるように鼓舞され、それをしばらくの間、彼らの最も高貴な仕事とするように励まされる、ということ以外の意図をもってはいません」(PD, 7)、とシュペーナーは書いている。また『敬虔なる願望』の後半で述べられる諸提案についても、「私のあらゆる提案は、もっぱらいかにしてあの従順な人々をまず助け、いかにして彼らの Aufferbauung のために必要なあらゆることを彼らに対して行なえるか、ということに向けられています」(PD, 8)、と述べてもいる。ところで今引用した文章に Aufferbauung が出てくるが、シュペーナーは Erbauung と同じ意味で使っている。たとえば『霊的祭司職』に次の文章がある。「敬虔な心の持ち主がともに集まり、聖書をともに読む場合には、一人一人は他の人の aufferbauung のためにつつしみ深く愛をもって、神が聖書の中で彼らに教えようとなさる事柄、他の人の erbauung のために有益であると彼自身が考える事柄を、語らねばなりません」(GP, 626f.)。

さて、上の二つの文章から明らかなことは、シュペーナーは教会全体の Besserung を目指すとしても、具体的にはさほど多くはない、ある一定の人々の Erbauung を特に問題としている、ということである。シュペーナーは何よりも「彼らの Aufferbauung のためになされることを、喜んで受け入れようとする人々」(PD, 8)に期待をする。彼がまず考えるのは「第三身分を……真の敬虔へと導く」身分(stände)の聖職者たち(PD, 28)である。そして、それにふさわしい人々を得るために、神学生教育が教会改革の一つとして提案される。では、Erbauung に貢献するにふさわしい

聖職者の資質としてどのようなものが要求されるのであろうか。これを知るためには、シュペーナーが Erbauung のためには、聖職者だけでは不十分であると考えていたことに注目しなければならない。『敬虔なる願望』で、「説教職が当然のことを必ずしもすべて実行できず、またそのように整えられない最大の原因の一つは、説教職が万人祭司職（das gemeine Priestertum）の助けなしにはあまりに弱く、一般に彼の牧会に委ねられている多くの人々に Erbauung に必要なことを実行するには、一人の人間では充分ではないからです。しかし〔個々のキリスト者が〕祭司としてその務めを行なうならば、説教者は彼らの監督者また長老としてその職務においてまたそれを公的ならびに私的に実行する上で、りっぱな助けをえて、彼の負担はあまり重くはならないでしょう」（PD, 60）、と述べている。ここで提案されている改革が、彼によって霊的祭司職と呼ばれるものである。

シュペーナーの霊的祭司職については別稿①で考察したが、本稿では、彼がその問題を中心的に扱った一六七七年の『霊的祭司職』によって、Erbauung との係わりを中心に述べることとしたい。すべてのキリスト者は霊的祭司（geistlicher Priester）として「神に喜ばれるいけにえを捧げ」（すなわち自らを神にゆだね、神をほめたたえ、困窮している人々には物質的財を捧げ GP, 569）、「自分自身とともに同胞のために神に祈り求め彼らを祝福し」（GP, 590）、「神の言葉が彼らのもとに豊かに宿るように求める」（GP, 595）という三つの務めをもつ。これは教会制度、すなわち領邦教会体制を否定する可能性をもつが、シュペーナーは公的と私的を区別することによってそれを回避する。領邦教会の公的礼拝においては正規の手続きをへた領邦教会の聖職者のみが説教しうる。しかし、個々の家において、また信者の相互の交わりにおいては、説教者だけでは不十分であり、Erbauung の実現のためにお互いが霊的祭司の役割を果たす必要がある、とシュペーナーは考える。「霊的祭司の務めは、いかにして彼らすべてが信仰の基礎を堅固なものとされ、敬虔な生活へと erbauen されるかを、ただ神の言葉の中に求めることです」（GP, 636）。その際にとりわけ重要なのは、今引用した文章の最後にも触れられているように、霊的祭司の第三の務めである神の言葉の人々への浸透である。シュペーナーは「キリスト者は、それぞれ一人一人自分で、神の言葉と係わらねばなりませんか」と問うて、「いいえ、彼らはお互いの aufferbauung のため、他の人々とともにそれを扱わねばなりません」と答える（GP, 621）。具体的には、人々を教え、誤りから連れ戻し、訓戒をなし、罪を犯している者には懲罰を与え、悲しんでいる人々には慰めを与えることが求められる（GP, 625-

630)。

そして、この霊的祭司職をよく機能させる方法として、コレーギア・ピエターティスをすすめる。「機会のあるごとに自らをerbauenすることが正しいのと同じように、何人かのよき友人たちが時々、次のような目的をもって集まることは、不当なことではありません。すなわち彼らは、説教をともに味わい直し、聞いたことを思い出し、聖書を読み、読んだことをいかに実行しうるかを神をおそれつつ話し合うのです」(GP, 635)。このようなコレーギア・ピエターティスを、シュペーナーは『敬虔なる願望』で神学生教育にも有効であるとしてすすめている。この集会では、それを指導する神学者は「神学生たちが彼らのerbauungに役立つことのみに注意するように、彼らとともに新約聖書を取り扱うようにすべき」(PD, 77)である。『敬虔なる願望』出版ののち、このようなコレーギア・ピエターティスと霊的祭司職の実行は、ルター派正統主義から領邦教会体制を脅かすものだとして非難されたので、シュペーナーは『霊的祭司職』においても『敬虔なる願望』と同様、聖職者が指導すべきことを力説し、決して混乱と無秩序が生じる恐れのないことを強調した(GP, 637-639)。

Erbauungの強調は聖職者の役割やイメージに変化をもたらすこととなる。ルター派領邦教会にあっては、彼らは領邦国家体制の中の官吏の一員であり、その任務の中心は公的礼拝における説教と聖礼典の執行である。彼らはしばしば説教者(Prediger)と呼ばれる。シュペーナー自身も『霊的祭司職』において聖職者を呼ぶときもっぱらPrediger を用いている。また正統主義では、宗教論争における神学者の役割が高く評価された。しかし、シュペーナーの場合、聖職者は教会の改革のために率先して、人々のErbauung確立に努める存在である。彼はそれ故、自らerbauenされていく存在として、人々の模範者であることが求められる(GP, 638)。一般の人々の世界からかけ離れた神学の中に閉じこもるのではなく、彼自ら、第一節で述べたような、einfältigな存在であることを要求される。そして、霊的祭司の務めが正しくなされるように指導し、人々を導く牧会者でなければならない。一方、領邦教会員もErbauungという聖職者と共通の目標を与えられる(GP, 639)。彼らはともに、einfältigな存在であることを求められる。両者の間には質的な相違はみられない。ただ、シュペーナーは公的礼拝と私的霊的祭司職の実践という区別を設けることによって、領邦教会制を肯定した。

さて、シュペーナーはerbauenを個々人が孤独に努めるものではなく、人々とともになさるべきことであると考えていたこと、そしてErbauungにおける聖職者と霊的祭司の役割を彼がどう

考えていたか、以上の点について検討してきた。それらを踏まえてこの章の最後に、シュペーナーが教会全体の改革をどのようなプロセスをへて実現しようとしていたか、またそれと Erbauung とがどのように係わるのかを、考えることにしよう。

教会改革についてシュペーナーは、「以前には教会の主だった指導者たちとあらゆる重要な particular Kirchen の代表者たちが Concilium につどい、共通の弊害について協議することが最も効果のある方法でした」と語る（PD, 4）。この particular Kirchen が具体的に何を指すか不明だが、個々の領邦教会を指すとすれば Concilium は大陸におけるルター派教会全体の会議になるであろうし、領邦教会内の個々の教会を指すとすれば領邦教会内の教会会議となるであろう。前者は当然不可能であるし、領邦教会が中心となった教会改革もシュペーナーはとらない。

彼は教会全体の改革と Erbauung とを直接結びつけることもしない。まず少数ではあっても、各地の領邦教会に存在する、Erbauung を望む人々に働きかける。そしてとりわけコレーギア・ピエターティスの「集まり全体が erbauen され」（PD, 56）、霊的祭司職が実現されていく中で、「ついには教会が著しく改善される」（PD, 60）とシュペーナーは考えるのである。[2] erbauen には土台を基礎にして建てあげるという発想がある。erbauen は何よりも個々人の出来事であるが、それらは神の言葉と信仰を土台として心において始められ、隣人愛へと建てあげられていく。そしてさらに erbauen されていく人々を土台にして、教会全体の Besserung へと向かうのである。個々人における信仰から敬虔な生活へ、個々人の Erbauung から教会の Besserung へ、そこには共通の発想が見られる。

ところで教会全体の改革について、シュペーナーは興味深いことを述べている。彼によればユダヤ人の改宗が「より良き教会の状態」が実現することのしるしであったが、これら改宗したユダヤ人の実例が人々によい影響を与えて、「聖なる熱心さをもっていわば競争して、ユダヤ人と異邦人からなる教会全体が一つの信仰とその豊かな果実において神に仕え、お互いに erbauen されることを期待」する（PD, 45）。最終的には教会改革は終末的現象であると理解されている。

シュペーナーは少数者の Erbauung から教会の改革へという方式をとる。これは、教会の改革については Besserung を使い、人々に関して Erbauung を使うという区別にもあらわれていることをすでに指摘したが、この章を終えるにあたって、その区別と一五四五年版ルター訳聖書[3]のドイツ語の用法とを比較しておきたい。シュペーナーの Erbauung、Besserung と関係するギリシア

語は、*οἰκοδομέω* とその名詞形の *οἰκοδομή* である。これらのギリシア語は新約聖書で大きく二つの意味で使われている。④ 一つは建物を建てるという本来の意味。この場合、ルター訳聖書はほとんど bawen（現代の綴りでは bauen）をあてている（たとえば、ルカ六・四八、マタイ二一・三三など）。もう一つは比喩的意味で、個々人の霊的成長とキリストの体なる教会が建てあげられるという二つの側面をもつが、ルターはそれらの二つの側面を区別しないでもっぱら bessern ないしその名詞形の besserung をあてている（たとえば、第一コリント一四・四、一二、エペソ四・二九など）。erbawen は、建築と比喩のどちらの意味でも使われているが、一五四五年のルター訳聖書における用例は、bawen や bessern、besserung と比べるときわめて少ない。建築の意味の例では、ルカ七・五に、象徴的意味では、エペソ四・一二に見られる。シュペーナーは、このようなルター訳聖書の用法ではなく、個々人に対して Erbauung を、教会全体に対しては Besserung をと使い分けた。この意味するところは、「おわりに」で若干考えてみたい。

① 拙稿「ルターとシュペーナー――万人祭司主義と霊的祭司職」『香川大学一般教育研究』（第四四号、一九九三年）。

② シュミットは、Erbauung は個人的なものであると言っているが、教会改革との関連を看過している。M. Schmidt, Spenners〉Pia Desideria〈, Versuch einer theologischen Interpretation, in: M. Greschat (Hrsg.), *op. cit.*, S. 124.

③ *D. Martin Luther: Biblia Das ist die gantze Heilige Schrifft Deudsche auffs new zugericht* (Wittenberg, 1545), Hrsg. v. H. Volz, 3 Bde (München: Deutscher Taschenbuch, 1974) を使用。

④ *Bauer-Aland Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments*, 6. Aufl. (Berlin: Walter de Gruyter, 1988) 参照。

おわりに

以上の考察から、シュペーナーの Erbauung 観の特徴として、次の点を指摘することができるであろう。第一に、Erbauung とは、信仰を土台としてその上に敬虔な生活が建てあげられていく、その動的な過程である。第二に、これは単に個人の内面的出来事としてではなく、信徒の相互の霊的祭司の務めの実行による共同の作業として理解される。聖職者はその際、模範者・指導者としての役割を果たすが、質的差異は強調されなくなる。それ故、シュペーナーは領邦教会体制を否定するのではないが、Erbauung はこれを内から掘り崩す要素をもった。第三に、erbauen されていく人々を土台として、教会が bessern されていくことをシュペーナーは期待する。個々人における信仰から敬虔へ、erbauen されていく人々から教会の改善へ、この二つには土台の上に建てあ

げられていくという共通の発想がみられる。そしてこの両方を生み出すのが神の言葉であるので、シュペーナーによれば、真の土台は神の言葉と素朴な教えである。

以上のような点から、キリスト教が生ける信仰とその果実である敬虔な生活からなるという広義の敬虔主義的要素と教会改革とをシュペーナーにおいて結びつけるものは、その Erbauung に見られる発想であったと考えてよいであろう。そして、Erbauung と教会全体の Besserung とを直接結びつけないシュペーナーにあっては、その教会改革のプログラムの中心としてコレーギア・ピエターティスと霊的祭司職が提唱されていることは、きわめて自然であった。両者を結びつけているもう一つの重要な点は、シュペーナーの時代認識である。敬虔の欠如を、単に個人の信仰のレベルの課題としてではなく、当時の教会が取り組み、また改善されていかねばならない教会全体の課題としてとらえる。そして、教会改革の実現の根拠を最終的に千年王国論的終末論においたのである。

以上のように、Erbauung はシュペーナーのキリスト教理解の本質に根差し彼の改革プログラムの全体に係わるものであって、単に「宗教的感情をあおりたて信仰の覚醒を促すような説教」ではなかったのである。ただ、後のイメージにつながる要素が全くないとはいえない。その点を最後に指摘しておきたい。

一つは、ルター訳聖書では個人の信仰形成と教会形成がともに Besserung や bessern で表現されていたが、シュペーナーの場合、個人の信仰形成が erbauen へ、教会改革が bessern へと分離されるという点である。もう一つの要素は、敬虔の本質が心におかれ、具体的に詳述されないという点である。シュペーナーの場合、これらの要素は彼の時代認識と結びつき、要素自体が一人歩きすることなく、社会的性格を失なわなかった。しかし、その後に時代認識が変わったり、シュペーナーと同時代であっても時代への取り組みという視点が欠落するとき、この二つの要素は次のことをもたらす可能性をもつ。すなわち、erbauen は教会形成や時代精神への対決との結びつきを失ない、単なる内面性に閉じこもり、一面性に落ち込んでいく可能性をもつのである。十八世紀の過程で、その現象は起こってくるであろう。

十六世紀末に始まる信仰の内面化の傾向は、シュペーナーの Erbauung 理解によって社会的性格をもつ接点が与えられた。ルター派正統主義とは異質な終末論やコレーギア・ピエターティスは Erbauung との結びつきの下に、彼の思想の中に中毒症状を起こすことなく吸収されえた。上述したように Erbauung は時代認識と密接に結びついており、今後はシュペーナーの他の著作

においてその関連を詳細に検討する必要があろう。そのことによって、十七世紀末の聖職者身分を中心とする階層にとって信仰形態と危機意識との係わりがどうであったかが、浮かび上がってくるであろう。

（香川大学教育学部助教授　　）